理事長対談全編
（12月号）

NPO法人環境保全機構
理事長
東條由布子氏

社団法人町田青年会議所
第40代理事長
川島敏徳

（東條由布子さんは東條英機さんのご親族で孫にあたります。）

～近現代史の歴史認識について～

川島理事長（以下川島）：本日はよろしくお願いいたします。東條さんとお会いするのは実を言いますと２回目でして、３月に開催された日本青年会議所、近現代史教育実践委員会の全体委員会の際に、開催場所が町田の地であったこともありご挨拶させていただきました。さて、早速対談を行わせていただきますが、今の子供達は、自虐的歴史認識により日本国家に″誇り″を持てずにいます。これからの日本を担う子供達が″誇り″を取り戻すためにも親世代である我々青年会議所が子供達にしっかりと伝えていかねばなりません。そこで、東條さんもご存知の通り、この″誇り″を取り戻す為に全国の青年会議所が協働運動という形で取り組んでいます。そして、この運動のように東條さんの語られるお話も、いろいろな方面から様々な見方をされています。その中で、我々青年会議所は、中庸的な立場を保ちながらも、捻じ曲げられた歴史だけは絶対に紡いではならないと思っていますし、本来ある真の歴史事実を伝えていかなければならないと考えています。そのためには、子供達にただ単に伝えるのではなく、子供達が歴史を紐解く力を身につけさせなければいけないと思います。歴史を美化することなく、あくまで本当の史実をしっかりと紐解いていこうということが大事であると考えているのです。

東條由布子（以下東條）：やはり学ぶ側からすれば、幾つもの説に分かれている場合には、それを選択するためにいろいろ調べたり、聞いたりして選択しますね。今のメディアは一方的に一つの見方しか提示しませんよね。これは非常に良くないことです。先日、日本青年会議所が制作された「誇り」を見ましたが、すばらしいビデオだと思っています。是非ともこのDVDを子供達に見せたいなと思います。平田青年会議所が勇気を持って学校で上映されたら、共産党がまず非難をし、韓国からも文句が出たようですが、そういうものに絶対屈してはいけないと思います。平田青年会議所の松浦理事長がこれを学校で上映して、共産党から叩かれてもなお、もう一度やろうと言われたのは、素晴らしい勇気ですね。そのような大変な時に、私を講演に呼んで下さった勇気！やはり今の世の中に必要なのは勇気です。自分が信じたことは勇気をもって行動すること、子供達に本当の歴史を、日本中の子供達にこのビデオを見せてやりたいです。

川島：我々町田青年会議所としても、協働運動を行っていますが、なかなかメンバー自体その一歩を踏み出せないことが正直ありました。しかし、３月に先生の話を聞かせてもらい、何かが変わったような気がします。また今も先生がおっしゃった様に、歴史に関してある一方の声や圧力に屈することなく運動を展開していこうと思います。（社）町田青年会議所設立４０周年記念フォーラムの講演の前段でも「誇り」のDVDを上映させて頂きますのでよろしくお願いします。

東條：嬉しいです。どんな圧力がかかっても頑張ってほしいですね。

川島：そう、単に共産党であったり、単に声の大きい人間だけに言われているだけであって、本来ある真の事実は変わらない訳ですから。

東條：声の大きい側に屈することは絶対にやってはいけません。堂々と勇気を持って続けて欲しいと思います。平田青年会議所がその後どうなったのかを心配しています。日本青年会議所全体が、なんとなく怖気づいて引っ込んでいる様な話を聞きまして残念だなと思っているのですけど、負けては駄目ですよ。

川島：そういった力に屈してはならない世代というのは、我々青年会議所世代だと思うんです。特に親世代として子供達に伝えなくてはならないし、子供達自身が選択できうるリテラシーの向上が必要です。自分たちが勉強といいますか、紐解く力、紐解くきっかけをつくるのは我々世代の責務です。先程、先生がおっしゃったメディアがよく偏った伝え方をしているとおっしゃいました。今まで先生が感じ取ったメディアの捉え方はどのようなものなのですか。

東條：すごく巧妙に編集しますが、去年の8月15日にお昼のテレビ番組に出た時に、相手5人は全員靖国神社反対でした。でも生番組の強い所は自分の言いたいことを言えるということです。その番組を見た人が５対１というもの自体がアンフェアーだと怒っていましたけど、それでも言いたいことが言えましたので、やはり生番組の強さだなと思いました。ＶＴＲは都合よく編集されてしまえばそれまでですからね。編集ほど怖いものは無いですね。上と下を切って真中だけを放映しますからね。

『誇り』とは

社団法人日本青年会議所が、各地の青年会議所と協働してDVDアニメ『誇り』を基にして確かな歴史認識を確立し、日本人としての自信や誇りを呼び覚まし、世界平和への心と思考力を育成する事業展開のために作られました。

川島：メディアは何を恐れているのでしょうか。

東條：やはり中国ですよ。中国の反応をすごく心配しています。

川島：日本の歴史の誇りを無くしてでも、国益を重視したいということですね。

東條：そうですね。政治の下に経済ではなくて、数年前から経済界の下に政治が来てしまったことが、一番の大きな間違いです。

川島：やはりそう考えると、本当に子供達に真実を理解させない限り怖い気がします。

東條：逆に言うと左翼の戦略を学ぶこと、いかに巧妙に深く静かに、いつの間にか勢力範囲を広げていますから。この間、沖縄で高校歴史教科書の「集団自決」（強制集団死）の件で１１万人のデモのニュースがありましたが、実は幾つかの団体が、正確に数えたら１万何千人しかデモに参加した人はいなかった。沖縄県民の十分の一がデモに参加したかの様にメディアが発表すると全体の流れがそうなってしまいますからね。あの大衆を誘導する巧妙さというのは学ばなくてはいけませんね。

川島：大きな動きというのはなかなか阻止できないという難しい問題がありますね。

東條：日本青年会議所は沢山いろいろな場所に支部がありますよね。運動は一本化すれば強くなります。左翼勢力は地下にもぐりながら上手く連携を保っていますよ。たとえば青山に「ウイメンズ・プラザ」というビルがありまして、それは女性の会館だというものの、左翼系陣営のたまり場になっていて、そこに国がお金を出しています。石原知事になってから予算をかなり削減されましたけど、そこで彼らが啓蒙する活動や講演会や、セミナーなどをやったりして、私たちの膨大な税金が使われています。そんなお金があったら、おじいさんやおばあさん達、介護を必要としている人々や、福祉施設は皆困っているのですから、税金はもっと有効に使ってもらいたいですね。敵のやり方を知ること、そうでなければ戦略は立てられないのです。

川島：限られた時間なので話を変えさせていただきますが、東條さんの祖父である東條英機氏についてお話をお伺いしたいと思います。東條英機氏は″戦犯″という言われ方をされる訳ですがもともと″戦犯″という言葉自体が侵略戦争を認めることになり、疑問符がつくおかしな部分であるかと思います。東條さんにとって″戦犯″とはどのように映っているのでしょうか。

東條：東條英機は大東亜戦争は国際法に関しては一切違反もしていないし、国際的には犯罪者ではないと申しています。ただし「開戦時の首相としての責任、陛下の御心に反し開戦を避けられなかったこと、また国土を焦土化し、国民に沢山の犠牲者を出したことについては、全て東條個人の責任である、七たび生まれ変わっても償えないほどの責任を感じている」とも言っています。昭和2６年4月28日にサンフランシスコ講和条約が発効した後、当時の社会党を中心とした国会議員が、いまだ世界中の軍事刑務所に収容されている所謂戦犯を釈放するよう、全国に署名運動を展開されました。その結果、当時人口７、０００万人の内、４、０００万人もの署名が集まりました。昭和28年８月の第１６国会に於いて、超党派で援護法が改正され、所謂戦犯の家族にも軍人恩給が支給されることになりました。また、閣議決定で所謂「戦犯」は全て「法務死」という名称になったのです。そして東京裁判の検事側の承諾を貰い昭和３３年を最後に、異国に収容されていた全ての所謂戦争犯罪者を帰国させました。安倍さんが総理になられた時に、閣議決定された村山談話を継承すると言われましたね。閣議決定は非常に重いもので村山談話を継承すると言われたのであれば、昭和２８年の閣議決定もきちんと出すべきだと思います。安倍さんも辛かったかとは思いますが。

川島：先程もメディアの恐ろしさのお話をしましたが、こういった部分で日本の歴史が自衛戦争から侵略戦争に変えられ、まだまだ″戦犯″に対してマイナスの観念だけが残っているような部分があります。これは本当に我々日本人自らが払拭しなければいけません。

東條：連合軍最高司令官のマッカーサー元帥が昭和26年５月３日のアメリカの上院軍事外交合同委員会の席上で「日本があの戦争に突入したのは自衛のためであった」と証言していますが、これはとても大事なことです。

川島：最初の話に戻りますが、真の歴史、真の事実がどっかで捻じ曲がっている。

東條：どうして日本は真実の歴史が言えないのでしょうか。政治家は勉強していないのではなかしら。分かっている人もいますが、それを言うと大変なことになる、大臣の首が飛んでしまうとか、何かの役付けを降ろされるとか。いうならば中国に対する遠慮があるのだと思います。でも自分の国の歴史の真実を発言するのに何の遠慮もいらないはずです。宮沢政権当時、「近隣諸国条項」というのを作りましたが、官房長官だった河野洋平さんは、ありもしない「慰安婦談話」を出したり、あの二人は酷いことをやりましたね。だって我がの子どもたちを教育する教科書に「近隣諸国の検閲」が必要である「近隣諸国条項」なんていう非常識なものを採用している国は、世界中日本しかないですよ。ですから外国から取材されると私は聞きます。「あなたの国に「近隣諸国条項」などというものがありますか？あなたの国はよその国を称えて自分の国を貶めるような展示をする戦争記念館を作りますか？」と。戦争というものは、どんな独立国にも政治の延長として、国家の権利として認められているのです。それは国際法に書かれています。また、自衛戦争か侵略戦争かは当事国が決めていいのです。東京裁判を裁いたマッカサー元帥も、開戦時の日本の首相も「大東亜戦争は自衛戦争であった」と証言しています。なぜ中国・韓国、あるいは日本のメディアが侵略戦争という権利があるのでしょうか。

川島：そう考えると、これからの憲法改正についても国民の議論を交え、真剣に考えないとなりませんね。

東條：そうですよ。独立国で軍隊を置いてはいけないなどと書かれた憲法を持っている国は無いでしょう。シンガポールのような２５０万人しかいない国でも、軍隊、兵役はありますし、中立国のスイスだって軍隊、兵役はあります。

川島：それはあくまでも自衛のためということですよね。自衛の部分を我々はしっかりと認識しなければいけないと思います。

東條：今、沖縄の集団自決問題でもめていますが、政権が変わるたびに真実の歴史を変え、教科書の中のまでころころ変へて良いのでしょうか、世界中探したってそんな国はありません。

川島：私もＪＣのメンバーになって初めて歴史というものに少し振り返ったような気がします。今先生がおっしゃたように、明治以降の近現代史と言われる中で特に敗戦を終えたあとの子供達の教育というにはどのような弊害があったのでしょうか。

東條：戦争が終った後は連合軍が7年間、日本を統治していました。占領時、憲法や教育基本法が作られてしまいました。その中身を見てみれば、まさしく占領した国から見て、いかに日本を難なく平穏に統治して行けるかを睨んだ上での、憲法であり教育だったのです。占領軍は文部省、そして天皇陛下のお力をフルに利用しましたね。終戦後、陛下は日本中をお回りになりましたけど、国民は歓喜の声でお迎えしましたよね。今だったら陛下が国民の中にお入りになり、もみくちゃにされるなど考えられません。何が起きるか分かりません。皇室と国民の間にはしっかりとした絆があったのです。お父さんと子供みたいな親子の情というのがあったのですね。だから国民を昔は「赤子」と言いましたね。そうしたしっかりとした心の結びつきがあったからこそ、あれだけ大きな戦争が終わった後もなお、国民は皇室の安泰を願い、譲位もされず御地位もそのままでしたね。日本国民がこんなに従順で、こんな大きな戦争に負けても陛下に対して、これほど畏敬の念を持っているというのは、マッカーサー元帥にしてみればびっくり仰天だったでしょうね。

川島：それだけその当時の国民は国に″誇り″を持っていたのでしょう。

東條：戦前は、国家に対しての忠誠心とか、日本人としての誇りをもち、家族を愛する気持ちが非常に深かったのです。だからこそ、あれだけ大きな国々を相手に向かって立ち向かって行けたのでしょうね。戦塵に散った先人がたの遺書を読みますと、天皇陛下の御楯になって、日本が永遠に繁栄しますようにと、愛しい家族が一日でも安泰でありますようにと書かれています。今の世の中にそれを当てはめようにも、そういう心の絆がないですね。皇室に対しての畏敬の念も薄れていますし、親子の絆も薄らいで来ていますしね。

川島：現在では個人主義や拝金主義「ゆとり教育」などもそういった部分で日本人としての心の荒廃を加速させてしまった。我々も何かに頼るという訳ではありませんが、何か心の拠り所、核になるものがないとすべてが崩壊してしましま す。自国を愛し郷土を愛するという愛に対しての念が薄らいでいるのでしょう。

東條：国を大切に思い、皇室に畏敬の念を持ち、家族を愛し、職場を愛し、そういう様々なものに対して「愛する心」が失われつつありますね。現代の人々には何かに自分の心を託す強い指針を失っている気がします。人々が何かを求めているとしたら、やはり自分を引っ張ってくれる何らかの強さのように思います。日本国民が最も尊敬し愛して止まないと言われる西郷隆盛の様な人が現代にいたら、日本は変わっていたでしょうね。今のように年寄りがいない核家族が増えた影響は大きいと思います。お年寄りと一緒にいれば、肩をもんであげたり、一緒に食事をしたり、いろいろなことを教えてもらったり、手助けをして上げたりする思いやりのこころが自然に育まれてきます。

川島：そういった部分では日本の誇りである歴史・伝統・文化などが崩壊しているのでしょうね。

東條：そう思います。文化も伝統も家族関係も教育も皆崩壊している気がします。やはり、何とかして、あなたがた若い人の力で、復古調にするという意味ではなく、もう一回原点に戻って国家のありかたや、家族のありかた、人間のありかたなど考え直してほしい。60年経った今、連合軍によって封印されてしまった過ぎ去った日本をもう一度見直して、良いところを取れば良いと思います。今は、何か言うと直ぐに、放送禁止用語とか、こういう言い方は駄目だとか言われ、はるかに束縛されている。物言えば唇寒し秋の風じゃないけど、今は一言一言気をつけて物を言わなければなりません。昔の方が自由があったような気がします。戦前、韓国の方達も名前は自由に選択できましたし、国会議員になった人も、外務大臣になった人も、多くの日本人が尊敬している偉い軍人になった人もいましたから、そういう意味で自由はありましたね。

川島：そろそろお時間がやってまいりました。この対談内容は町田ＪＣだけでなく他青年会議所も目を通してもらえることと思います。最後に青年会議所にエールを送って頂けますか。

東條：私は、近現代史の見直しをされ、日本の再生のために頑張っておられます日本青年会議所の皆さまに、心から感謝を申しあげ、その勇気に感動しています。日本青年会議所が制作されました『誇り』というDVDを見させていただきましたが、未来の日本は安泰だなと思いましたね。近現代史がいかに大事であるかに注目されて、その見直しをされている青年会議所の活動に大いなる期待をし、日本の将来に希望を持たせて頂いたことに心から感謝を申し上げます。

川島：ありがとうございます。我々も真の歴史を日本人として伝えていきたいと思います。それが我々世代の責務です。草の根運動と成りますがこれからの日本のためにも頑張って参りますので是非とも今後もよろしくお願い致します。

東條：大切な日本を担う子供達のためにも、どうかよろしくお願いいたします。

川島：本日はお誠にありがとうございま